

ジョサイア・ストロングと社会的福音

森 孝 一

は じ め に

19世紀末から20世紀のはじめにかけて、アメリカのキリスト教界で活躍した会衆派の牧師ジョサイア・ストロング (Josiah Strong, 1847-1916) は、一方で当時のアメリカの帝国主義的海外膨張政策に理論的基礎を与えたアングロサクソン至上主義者であったという側面と、他方アメリカの社会的福音 (Social Gospel) 運動の初期の指導者であったという一見矛盾する二つの側面をもった興味深い人物である。

私はさきに日本アメリカ学会の紀要『アメリカ研究』において、この一見矛盾すると思われる二つの要素が共存することを可能にしたストロングの思想の構造の特徴と問題点を分析し、拙論「ジョサイア・ストロングにとっての世紀末¹⁾」として発表した。しかし、紙幅の関係でさきの拙論においてはストロングのアングロサクソン至上主義の分析に集中せざるをえなかった。今回のこの小論は、ストロングの社会的福音との取り組みを紹介することを目的とするものである。

1. 福音主義教会の覚醒をめざして：アメリカ福音主義連盟

ストロングは1847年にイリノイ州ネーパーヴィルに生れた。オハイオ州ハドソンで少年時代をおくり、1869年ウェスタン・リザーヴ・カレッジを卒業の後、当時としては最もリベラルな神学校の一つであったレイン神学校で学

んだ。当時の学長は Lyman Beecher であった。1871年にこの神学校を卒業後、ワイオミング州のフロンティアの町チェーンの会員数13人の教会を2年間牧会した後、母校のウェスタン・リザーヴ・カレッジのチャプレンとして3年間働いた。その後、オハイオ州サンドスキーの第一会衆派教会の牧師となり、この教会を5年間牧した後、1881年にはオハイオ州国内伝道協会（Home Missionary Society）の幹事となり4年間この職にあったが、1885年に会員数350名のシンシナティのヴァイン・ストリート教会の牧師に就任した。フロンティアの最前線の小さな教会と当時工業化が急速に進みつつあった都市の教会での牧会の体験と、国内伝道協会の幹事として諸教会の現状に接した経験は、ストロングに当時のアメリカ社会が直面していた諸問題とそれに対する教会の課題を考えさせずにはおかなかった。

ストロングは1885年12月に、彼が牧していたヴァイン・ストリート教会において、都市伝道のための5日間の超教派の会議を企画したことによって社会的福音運動への第一歩を踏み出した。この会議には当時の有力な社会的福音運動の指導者と自由主義神学者が多数参加した。その中には Washington²⁾ Gladden, Lyman Abbott, Richard T. Ely も含まれていた。

アメリカ合衆国における社会的福音運動はこの当時はまだはっきりとした形をとるに至っていなかった。アメリカの社会的福音運動の代表的存在である Walter Rauschenbusch が『キリスト教と社会的危機』を発表したのは1907年になってからのことである。社会的福音ははっきりとした運動とはなっていなかったが、アメリカ社会の都市化と工業化にともなう都市問題・労働問題はすでにこの当時現実のものとなっていた。1877年には鉄道大ストライキがおこり、政府は連邦軍を派遣してこれを鎮圧しなければならなかった。

都市問題と労働問題が深刻化しているにもかかわらず、19世期末のメインラインの教会はこれらの問題とは無縁の場所であった。当時の社会問題はアメリカ社会の構造の変化によってもたらされたものであった。すなわち工業化とそれにともなう新移民の流入である。しかし、メインライン教会はそのような社会構造の変化以前にすでに形成されており、工場労働者とは無縁の場所であった。実際、都市のメインライン教会のなかに労働者を見つけるこ

とはきわめて困難であった。ストロングはニューヨークのブルックリンにあった聖公会、オランダ改革派、会衆派、長老派の教会の4人の牧師の会話を1893年に出版した『新時代』のなかで紹介しているが、彼らの教会には労働者は一人いるかあるいは皆無であるかであった。³⁾ 社会的福音運動の指導者となった牧師たちは例外なく都市の教会の牧師たちであった。彼らは誰に教えられたわけでもなく、自分の教会の周辺の地域の現実と、その中にあった教会の在り方についての省察によって社会的福音運動へと押し出されたのであった。

アメリカにおける社会的福音運動のもっとも初期の指導者で、「社会的福音の父」と呼ばれている Washington Gladden はマサチューセッツ州スプリングフィールドの北会衆派教会の牧師であったが、彼はすでに1875年の秋に、彼の教会において労働問題に関する一連の講演会を日曜の夜毎に開いていた。彼は1876年にこの講演を『労働者とその雇用者たち』として出版したが、これはアメリカにおける社会的キリスト教にとっての最初の道標のひとつとなったと言われている。⁴⁾ ストロングが企画した1885年の都市伝道に関する5日間の会議は、1875年に Gladden が行なった日曜夜の連続講演会からなんらかのヒントを得ていたのではないかと考えられる。いずれにしてもストロングはこの都市伝道に関する会議によって、Gladden と並ぶアメリカの初期の社会的福音運動の指導者となったと言えよう。

社会的キリスト教をめざしていた当時のアメリカ・キリスト教界の指導者たちによって、ストロングは1885年の都市伝道の会議の企画者として一定の評価を受けたわけであるが、シンシナティの一牧師であったストロングが全国的に注目をあびることとなったのは、彼が1886年に発表した『我が祖国』によってであった。⁵⁾ これは彼がオハイオ州支部の幹事をしていた全米国内伝道協会のためにまとめた、当時のアメリカ社会とその文明についての彼の分析と提言であった。『我が祖国』はベストセラーとなり、ストロングの名前は一躍全国の人びとに知られるところとなった。彼が『我が祖国』の中で危機の時代を守るべきものとして主張した「我が祖国」の内実は、ある特定の教派の教義に限定されることのない、アメリカ社会と国家の基盤にある宗

教的伝統としてのキリスト教と、共和主義の原理と、それを實現するところの人民自身の手による民主的な政治体制であった。⁶⁾ ストロングはこのよう
なアメリカの基本的な原理を危機にさらしている「危険な要素 (perils)」
として、移民、ローマ主義 (カトリック)、公立学校、モルモン教、暴飲、
社会主義、富、都市の8つをあげ、それぞれ各1章をあてて分析している。
これについてはすでに他のところで紹介しているので、ここでの説明は省略
し、ストロングの社会的福音との取り組みと関係のあるもののみ、後に触れ
ることにしたい。⁷⁾

『我が祖国』の成功とさきの都市伝道に関する超教派の会議の企画能力が
評価されて、ストロングは1886年の秋に、アメリカ福音主義連盟 (The
Evangelical Alliance for the United States) の総幹事に就任することとなった。
蛇足とも思われるが誤解を避けるために、ここで「福音主義」 (evangelical)
という用語の意味について述べておきたい。今日、「福音主義」はリベラル
に対する保守的なキリスト教の立場を指すものとして用いられる場合が多い
が、19世紀のアメリカ・キリスト教界においては「福音主義」は本来の意味
どおりの「宗教改革の伝統に立つ」という意味である。19世紀末のアメリカ・
キリスト教界においてはすでに、自由主義神学を奉ずる「モダニスト」とい
わゆる「ファンダメンタリスト」との対立が顕在化しつつあった時代であっ
たが、彼らはどちらも自分たちの立場を「福音主義」であると考えていた。⁸⁾
それゆえ、アメリカ福音主義連盟は保守的なキリスト者による連盟という意
味はなく、アメリカにおけるプロテスタント正統主義の伝統に立つ諸教派によ
って構成される連盟という意味に理解されるべきである。

ここでストロング以前のアメリカ福音主義連盟について触れてみたい。ア
メリカ福音主義連盟の発端は1846年にさかのぼる。1846年の8月19日から9
月2日まで、ロンドンにおいて19世紀における最初のプロテスタントの国際
会議となった世界福音主義連盟 (World Evangelical Alliance) の大会が開
かれ、アメリカから80名の人が⁹⁾参加した。彼らは帰国後、同年12月14
日にニューヨーク市のグリーン・ストリート・メソヂスト教会でアメリカ
における福音主義連盟の結成についての最初の会合をもった。¹⁰⁾ その後数回

の会合を重ねた結果、1847年5月5日から11日までニューヨーク市のマーチャント・ストリート長老教会で発足のための会議がもたれ、アメリカ福音主義連盟が成立したのであった。参加者は約200名であった。¹¹⁾しかし、ちょうど当時は奴隷制をめぐるアメリカのキリスト教界を二分する論争がなされていた時代であり、結成されたアメリカ福音主義連盟は実質的な機能をはたすことなく南北戦争に突入し、終戦後の再編を待つことになるのである。

1865年に南北戦争は終結し、アメリカにおけるプロテスタント諸教会は1867年に再びアメリカ福音主義連盟のもとに結集した。この時がアメリカ福音主義連盟にとっての実質的な意味での設立であった。¹²⁾アメリカ福音主義連盟はその設立の当初から反カトリック、反自由思想(具体的にはユニテリアン、ユニヴァーサリスト)を標榜する正統主義プロテスタント教会の連帯をめざす団体であった。南北戦争の復興期にはとくに「文明の宗教」である「共和国の宗教」(Religion of the Republic)としての自己認識を強めていたが、1880年代に入りアメリカの工業化・都市化の進展にともない、大量のいわゆる「新移民」の流入と労働問題・都市問題の深刻化のなかで、それらの社会問題をになう団体への体質改善がもくろまれた。すなわち、メインラインの正統主義プロテスタントの友好団体から、社会改革をめざす諸教会の協同(co-operation)のための団体への変質であった。ストロングはこのような新生のアメリカ福音主義連盟のオーガナイザーの役割を期待されて、1886年に総幹事に就任したのである。

C・H・ホプキンズはアメリカの社会的福音運動の歴史に関する著作のなかで、アメリカにおける「(社会)改革のための教会の協同は、1887年の『福音主義同盟』(アメリカ福音主義連盟のこと)の会議から出発し……1908年の『教会連合協議会』(Federal Council of Churches)の組織に導かれた」と述べている。¹³⁾この1887年のアメリカ福音主義連盟の全国会議がストロングが総幹事として最初に手掛けた仕事であった。ストロングは総幹事としての任期中に、さらに1889年と1893年の2回のアメリカ福音主義連盟の全国会議を企画運営したのである。ホプキンズは19世紀末におけるアメリカの社会的福音運動のなかでもっとも注目される出来事はアメリカ福音主義連盟の3回の

全国会議であったと語っている。¹⁴⁾すなわち、ストロングが総幹事として企画した3回の全国会議によって、アメリカのメインライン・プロテスタント教会は、それまでの個人の魂の救済を中心とした活動だけが正統主義的なのではなく、社会的キリスト教あるいは社会的福音もまた正統主義的であることをはじめて認識したと言うのである。

1887年の全国会議は12月7日から3日間、ワシントンD.C.で行なわれた。その報告書には「国家的危機と可能性」という題がつけられている。会議はストロングが『我が祖国』において展開した議論に沿って進められた。アメリカ社会とアメリカ文明にとっての危機となる社会的要素についての発題と討論が行なわれ、続いてアメリカの伝統のなかにあるキリスト教的資質（Christian resources）についての発題があり、最後にアメリカがもっているキリスト教的資質を社会問題に適用するために、¹⁵⁾諸教会がどのように協同すべきかについての理論と方法が発題された。会議の全体の構成と企画において、ストロングの個人的な立場が色濃く反映されているという印象が強い。

ストロングは最終日に、「キリスト者の業における協同の方法」という発題を行ない、三つの分野における協同を提案した。第一は社会問題・産業問題の学習と、それらの問題の解決のためにキリスト教的原理を応用（application）するための協同である。第二には福音を全ての人びとに宣教するための協同である。第三に社会改革を実現し、¹⁶⁾アメリカの（共和制の）諸組織を守るための協同である。

1887年の全国会議に対する各教派の反応は全体的に良好であった。¹⁷⁾200を越す全国の新聞がこの全国会議について好意的に報道した。そのうちの半数はキリスト教に関係のない一般紙であった。¹⁸⁾ストロングは新しいアメリカ福音主義連盟の路線に自信を深め、1888年から1889年にかけて、全国にアメリカ福音主義連盟の支部を設立することに努力した。ストロングがめざしたものは福音主義教会の活性化であった。具体的には社会的福音に目覚めたキリスト者がその地域の家庭を訪ね歩き（Home Visiting）、個人的に説得し、社会的キリスト教への自覚を促すという方法である。

各地の福音主義連盟の形成と運営はストロングとアメリカ福音主義連盟の

実務幹事 (Field Secretary) の Frank Russell のスーパーヴィジョンのもとで行なわれた。1888年12月には、ふたりの名前で全国の福音主義連盟の支部に対して次のような内容の活動調査が行なわれた。調査の内容は、各福音主義連盟の活動が始まった時期、参加している教派名とその人数、参加を渋っている教派名、支部の活動がカバーしている人口、家庭訪問を行なっている者の人数、活動の結果としての教会出席者数の変化、支部の活動の種類と回数、スーパーヴァイザーに家庭訪問の報告をしない者の割合とその理由、活動から生れた新たな組織 (agencies) と改革、活動の結果増加した聖書の配付数¹⁹⁾であった。

この調査項目からストロングの社会的福音の目的とそれを実現するための方法についての彼の考えを推測することができるのではないだろうか。彼は社会問題の解決をめざして社会の改革を行なわねばならないと考えていた。この改革の担い手は教会である。しかし、当時の教会は彼の目には眠っているように思われた。その教会を覚醒させるには、社会的キリスト教によって覚醒された個々のキリスト者によらねばならない。そのための方法は諸教会の協同と家庭訪問による説得であった。このようにストロングは社会改革の必要性を痛感してはいたが、そのための方法は伝統的なものであったことに注意する必要がある。

それではストロングが着手し、発展させようとしたアメリカ福音主義連盟の社会的福音の路線は順調に進展し、アメリカ福音主義連盟を変えていったのだろうか。さきのワシントン D.C.での全国会議の2年後に、ボストンで開かれた全国会議でのストロングの発言を見てみよう。彼は前回の全国会議以後のアメリカ福音主義連盟の進展について、総幹事として報告を行なった。彼はまず1888年に Russell が実務幹事に就任したことについて触れ、全国の福音主義連盟の支部が100を越えた現在、彼のようなこの種の仕事についての経験豊かな人物のスーパーヴィジョンがなければ福音主義連盟は有効に機能しないと語っている。²⁰⁾次にアメリカ福音主義連盟の発展を妨害している5つの障害について順次語っている。第一は急激な変化を好まない古い体質があること。第二は多くの人びとが無関心であること。第三は大半のキリ

スト者は新しい路線である社会的福音運動の経験がないために、魂の救済を中心とする伝道を行なう牧師に満足していること。第四に都市の牧師は日常の牧会だけで非常に多忙であり、それをやめて社会的福音に取り組むことができないこと。第五は各教派に存在する協同を阻むセクト的体質である。²¹⁾ ストロングは報告の最後に、以上のような障害があるにもかかわらず、この2年間の経験は家庭訪問 (personal touch) と各教派の協同という二つの原理が、アメリカ福音主義連盟にとってもっとも価値あるものであり、最終的に勝利をおさめるものであることを明らかにしたと主張した。²²⁾ ストロングの報告は彼の路線が必ずしもアメリカ福音主義連盟の中で完全に支持されてはおらず、スーパーヴィジョンの必要性について最初に触れていることは、それに対する反発がアメリカ福音主義連盟の中に存在したことを暗示しているように思われる。

ストロングが総幹事として企画運営した3回目のそして最後の全国会議は、1893年にシカゴで開催された。この年、コロンブスのアメリカ到着400年を記念して、シカゴ市のミシガン湖畔でコロンビア万国博覧会が開催された。コロンビア万国博覧会は20の分野にわたる世界会議を順次博覧会会場の芸術館 (Palace of Fine Arts) で行なったが、その中でもっとも注目を集めたのが万国宗教会議 (World's Parliament of Religions) であった。²³⁾ 万国宗教会議は本会議とそれと平行して行なわれた各教派および各キリスト教団体の個別の会議からなっており、アメリカ福音主義連盟の全国会議は10月8日から14日まで、1週間にわたって開催された。

今回の全国会議は4つの部分に分れていた。第一は世界のプロテスタントの現状について。第二は信教の自由について。第三はキリスト教の統一と協同について。第四は教会と社会問題についてであった。「教会と社会問題について」の分野では社会的福音のさまざまな試みの実際が語られた。

当時のアメリカ福音主義連盟の状況を知るうえで、とくに興味深いのは第三の「キリスト教の統一と協同について」のストロングとユニオン神学校教授であった Philip Schaff の見解の相違である。Schaff は万国宗教会議の参加者の中でもっとも理想主義的な立場をとっていた。彼は脳卒中で倒れた

が、病を押して万国宗教会議に参加したほどに、キリスト教の統一を熱心に主張した人物であった。²⁴⁾アメリカ福音主義連盟の会議においても、彼は「キリスト教世界の再統一」について熱弁をふるった。彼はプロテスタントの統一だけでなく、カトリック、正教、ユニテリアンをも含むキリスト教の統一を主張し、アメリカ福音主義連盟をその大目的へと向う一段階と理解したのであった。²⁵⁾

一方、ストロングは「アメリカ福音主義連盟の目的」についての発題のなかで教会の協同の三つのかたちについて言及している。第一は Schaff の主張である教会の統一 (Organic Union) である。しかし、ストロングはこのような統一はあったとしてもずっと先のことであり、協同がいま緊急に必要な状況のもとでは、アメリカ福音主義連盟がこの統一に向って努力することは不可能であると判断している。第二は教派の連合 (Denominational Federation) である。ストロングはこれは可能ではあるが、結局は教派の指導者による (at the top) 連合であり、力にはならないと考える。第三は地域の諸教会による協同 (Co-operation of the Local Churches) である。彼はこれは指導者による連合ではなく、草の根の連合 (federation at the bottom)²⁶⁾ であり、もっとも大きな成果が期待できると考えた。

Philip D. Jordan はストロングを「ナショナリスト」、Schaff を「インターナショナリスト」と呼び、この二つの路線の対立がアメリカ福音主義連盟のなかにあったことを認め、万国宗教会議のあと Schaff がこの世を去ったことによってストロングの立場がひきつづきアメリカ福音主義連盟の路線となったと分析している。²⁷⁾しかし、この対立はアメリカ福音主義連盟内のストロングの社会的福音を求めていく路線をめぐる対立と理解すべきであろう。すなわち、アメリカ福音主義連盟を社会改革をめざすものとするのかどうかという基本的な問題をめぐる対立であった。確かに Schaff の死によって、万国宗教会議ののち数年間はストロングの社会的福音路線が継続したが、アメリカ福音主義連盟におけるストロングの立場はこの時すでに危うくなっていたのである。

1897年5月、アメリカ福音主義連盟の予算委員会は10月から始まる次年度

の予算について、ストロングの給料と活動費の減額と彼から提案されていた新しい事業のための予算請求を否決することを決定した。同時に理事会はアメリカ福音主義連盟を1885年以前の段階の在り方に戻すことを全会一致で決定した。ストロングが総幹事になったのが1886年であったから、実質的にはストロングをアメリカ福音主義連盟から排除することの決定であった。²⁸⁾ ストロングは12年間勤めた総幹事の職を辞職した。

アメリカ福音主義連盟がストロングを辞職に追い込んだ理由は、ストロングの社会的福音をめざす活動の方法がアメリカ福音主義連盟の全体の水準からすると過激すぎるということであった。ストロングが辞職することを報じた『ニューヨーク・タイムス』は後任の L. T. Chamberlain のコメントを載せている。彼はストロングがアメリカ福音主義連盟の本来の目的であった、全世界のキリスト者の統一と全世界における信教の自由の追及という目的から逸脱したと語った。²⁹⁾ ストロングの辞任の8ヵ月後のアメリカ福音主義連盟の理事会の記録によると、この時、理事会はアメリカ福音主義連盟の任務をキリスト者の統一と信教の自由と教会の活動における協同を強化することであると位置付けている。協同の方法に関してはアメリカ福音主義連盟がある特定の方針を強制するのではなく、それぞれの地域において独自に選び取られるべきだとしている。³⁰⁾ 先にストロングと実務幹事の Russell が全国の福音主義連盟の支部に宛てて送った調査書の内容や、1889年の全国会議でスーパーヴィジョンの必要性をストロングがとくに強調したことを紹介したが、ストロングを中心とする中央の強力な指導に対する不満があったようである。

ストロングはアメリカ福音主義連盟の一般的な水準から見ると過激すぎたと述べたが、彼は彼なりに随分アメリカ福音主義連盟の現状に対する配慮は行なってきた。彼は協同を考える時、現実的な見地からユニテリアン、ユニヴァーサリスト、スエーデンボルグ教会との協同は拒否していた。自由主義神学者の Lyman Abbott はこのようなストロングの福音主義教会の現状に対する配慮を批判していた。³¹⁾ ストロングはこのように左右から批判されることとなったのだが、そのような在り方を彼に選ばせたものは、社会的福音の実現が何よりも緊急で重要であるという認識であったのではないだろう

うか。彼は神学的立場の違いが協同を妨げることを嫌い、社会的福音の実践という点で協同するために神学的議論を避けてきた。同時に、ストロングは当時のアメリカ社会における社会的福音の現実的な担い手として、メインライン教会の協同のための団体であるアメリカ福音主義連盟に希望を置き、アメリカ福音主義連盟が社会的福音によって早期に覚醒することをめざしたため、中央による強力な指導をあえて行なったのであった。しかし、今やストロングは福音主義教会の覚醒についての彼の希望は安易すぎたことを思い知らされたのである。

2. 啓蒙活動への集中：社会福祉同盟とアメリカ社会福祉研究所

『ニューヨーク・トリビューン』はストロングが三つの大学から学長として招かれていたことを報じている。そのうちの一つはニューイングランドの全国的に有名な大学であったようだ。³²⁾しかし、彼はそのような社会的な名誉に囚われることなく、この時すでに社会的福音の実現に向けて次の一步を踏み出そうとしていたのである。アメリカ福音主義連盟の総幹事を辞職して約3ヵ月後の1898年8月25日、ストロングは社会福祉同盟(The League of Social Service)を設立する。

ストロングは12年間のアメリカ福音主義連盟での経験と挫折をとおして、社会的福音へのキリスト者と教会の覚醒は容易なことではないことを痛感していた。アメリカ福音主義連盟時代、ストロングは家庭訪問と説得を社会的福音実現の重要な手段と考えたが、これは社会の現実とその解決の方法を「知る」ことによって、現状を変えていくことができるという彼の確信から出ていた。社会福祉同盟において彼がめざしたことは、社会的福音への覚醒のための啓蒙と教育をより効果的な手段で行なうことであった。

社会福祉同盟の組織構成はこのことを如実に語っている。社会福祉同盟は7つのサービス部門から構成されていた。第一は情報と研究(Service of Information and Research)、第二は図書および公文書(Service of Library

and Archives)、第三は第一と第二の諸情報の解釈 (Service of Interpretation) で、これにはスライド、図表、地図、模型、計画の作成が含まれていた。第四は出版 (Service of Publication) で、機関誌の *Social Service* や州法の要約、リーフレットなどの出版を行なった。第五は広報 (Service of Publicity) で、この中心は講座部 (Lecture Department) であり、その他に新聞による広報活動や会議の企画を行なった。第六は個人としての研究者や来訪者に対するサービス。最後は社会経営博物館 (Museum of Social Economy) である。これはすでに1884年に設立されていたパリの社会博物館 (Musée Social) のアメリカ版をめざしていたが、パリの社会博物館が労働問題に関する専門の研究者を対象としたものであったのに対して、社会経営博物館は社会問題全般についての啓蒙を目的としたものであった。³³⁾

社会福祉同盟は会員の会費によって維持されていた。会員は個人会員と団体会員 (Collective Membership) があり、団体会員のなかには地方自治団体会員 (Municipal Membership) と企業会員 (Commercial Membership) があった。会費は個人会員は1年1ドル (1899年9月からは年2ドル)、団体会員は1年25ドルであった。会員には後に紹介する個別の問題に関するリーフレットが無料で送られ、またニューヨークにあった社会福祉同盟の情報部や博物館が無料で利用でき、講座についても割引料金で受けることができた。企業会員の数をもっとも多かったのは1901年12月であったが、この時93の企業が会員になっていた。そのなかにはジェネラル・エレクトリック社やウエスティンハウス電器会社も含まれていた。³⁴⁾ 企業会員はアメリカだけでなく、オランダ、イギリス、スコットランド、イタリアの企業も含まれていた。団体会員は市や企業における社会福祉や社員福祉についての情報と助言を社会福祉同盟に求めた。たとえば、クリーヴランド・クリフス鉄鋼会社は労働者のためのリクリエーション施設と共同浴場について、ジェネラル・エレクトリック社は社員住宅についての情報と助言を求めてきた。³⁵⁾ また社会福祉同盟はニューヨーク市が1901年に、低所得者のために計画した住宅プロジェクトにおいて重要な役割を果たした。³⁶⁾

ここで社会福祉同盟の具体的な活動の一つの例を見てみよう。それは1899

年4月にニュージャージー州トレントン市で行なわれた「社会的リヴァイヴァル週間」(Social Revival Week)である。形式はアメリカ・キリスト教に伝統的なキャンプ・ミーティングのリヴァイヴァル集会の形をとって、毎晩1週間連続で行なわれた。まずストロングが講話を行ない、つづいてストロングとともに社会福祉同盟の活動の中心的役割を担っていた幹事(Organization Secretary)の William H. Tolman がランタンの灯りを利用した幻灯機(lanternslides)を使ってストロングの講話の中心点をヴィジュアル化した。英語がいまだ不自由な新移民にとって、これは効果的な方法であった。この時までに社会福祉同盟は約3千枚のスライドを備えていた。トレントン市の集会であつかわれたテーマは、キリスト教は何のために存在するのか、キリスト教と労使関係、社会のルールと良心、20世紀の都市と危機的要素、20世紀の社会問題とその解決方法、トレントン市への応用などであった。³⁷⁾この社会的リヴァイヴァル週間の具体的な成果として、トレントン市のある会社はその工場の労働者のためにモデル住宅を建設することになった。このような社会的リヴァイヴァル集会は好評で、ボストン、シカゴ、セントルイスなどでつぎつぎに開催された。とくにランタン・スライドの人気はたかく、機関誌の *Social Service* には社会的リヴァイヴァル集会の開催都市名と日時が紹介されていたので、その近くの都市の会員はその続きにスライドを利用することができるようになっていた。

社会問題とその改革についての社会福祉同盟の啓蒙運動はその活動の場所をアメリカに限定していなかった。さきに社会福祉同盟の会員にアメリカ以外の国の会員がいたことに触れたが、それだけではなく、社会福祉同盟は直接に海外で啓蒙活動を行なった。それは1900年のパリでの万国博覧会への参加である。社会福祉同盟はこの万国博の「教育と社会経営部門」(Department of Education and Social Economy)のアメリカからの代表という資格で参加したが、政府からの財政的援助は全くなかった。そのため社会福祉同盟は5千ドルを自分たちで賄わなければならなかった。展示は本、図表、記録、模型、ランタン・スライドなどであったが、展示は好評で、ストロングと Tolman はパリ万国博からグランプリを送られた。³⁸⁾パリ万国博

への参加に続き、1904年にはセントルイス、1906年にはミラノの万国博に参加し、社会福祉同盟は国際的にアメリカ版の社会博物館（Musée Social）として、その存在を認められるようになった。³⁹⁾

ストロングは社会福祉同盟の啓蒙活動の手段として、個別のテーマについてのリーフレットの制作と配付を重視していた。これはアメリカ福音主義連盟の総幹事であった時からの彼のアイディアであり、1897年に次年度の新しい事業計画として予算委員会に提案したが拒否されたものであった。社会福祉同盟は34種類のリーフレットを作成したが、そのうちの中心的なものをあげると、良き市民となること、州法、社会福祉教育、反モルモン教、市政の諸問題、⁴⁰⁾ 倹約、労使問題の仲裁、子供を救え、村おこし、休日などのテーマであった。社会福祉同盟はリーフレットのそれぞれのテーマに応じて、その分野の著名な専門家に執筆を依頼した。

社会福祉同盟のリーフレットのなかでもっとも注目され、また世論形成の力を発揮したのは「反モルモン教」に関するものであった。反モルモン教のリーフレットは1899年2月に作られたが、これが1900年にユタ州選出のBrigham H. Roberts 議員を上院から追放することとなったいわゆる「反ロバーツ・キャンペーン」の端緒を開くものとなった。ロバーツ上院議員の追放の根拠は1887年に制定されていた重婚を禁止するエンドモンド・タッカー法に対する違反であった。1862年のモリル法以来、モルモン教の重婚を禁止するいくつかの連邦法が制定されていたが、モルモン教会はこれに対して憲法の信教の自由を根拠に裁判で争ってきた。しかし、連邦最高裁はピューリタンの倫理観の優勢な世論を配慮してか結審を先延べにしつづけていた。19世紀末のアメリカのプロテスタント教会はモダニストとファンダメンタリストの対立が顕在化しつつあったが、反モルモン教と聖日の遵守という二つの問題においてはプロテスタント教界の全体が一致して、これをアメリカ文明を支えるアメリカ的キリスト教の砦として、ここに結集していた。

ストロングは1886年の『我が祖国』のなかで、すでにモルモン教をアメリカ的原理に対する危機の一つにあげていた。しかし、ストロングにとってモルモン教の危険性は重婚という倫理的なことがらにあったのではなく、モル

モン教会の体質の中にある全体主義的要素にあった。さきにストロングが『我が祖国』を書いた動機について、アメリカ社会とその文明を支える原理を守ることにあったことを指摘したが、モルモン教はその一つである共和制の原理、すなわち自立的な市民が自分の判断と民主的な制度を用いて社会を形成していくことについての脅威となると考えたのである。すなわち、ストロングにとってモルモン教会は世界でもっとも完全な全体主義的組織であり、権力は管長に集中しており、選挙に際しても教会の上層部の決定が信徒の全体を徹底して拘束すると考えていた。⁴¹⁾ 反モルモン教の社会福祉同盟のリーフレットは約70万部が、全国の6千名ちかい牧師や超教派の青年団体・婦人団体などをとおして配付され、反ロバーツ・キャンペーンに大きな役割を果たすこととなった。この時、ストロングの反モルモン教の主張の内容が正確に理解されたのかどうかは不明である。むしろ、重婚というアメリカ社会の一般的世論にとっては明白な倫理的犯罪を犯しているモルモン教会をスケープゴートにすることによって、都市化と工業化によってもたらされたアメリカ社会の価値観の動揺の時期に、社会としてまた国家として一体感を保とうとしたのではないだろうか。

社会福祉同盟が会員の会費によって維持できたのは最初の3年間だけであった。1902年2月に社会福祉同盟はニューヨーク州立大(The University of the State of New York)と契約を結び、名称をアメリカ社会福祉研究所(The American Institute of Social Service)と変えて財政の建て直しをはかった。新たに理事会が構成され、理事には Andrew Carnegie や V. Evritt Macy らの財界の大物が就任した。アメリカ社会福祉研究所の年間予算3万ドルのうち、7700ドルは大企業からの献金であった。⁴²⁾

名称は変ったがアメリカ社会福祉研究所の活動内容は社会福祉同盟の時と変ることはなかった。それは社会福祉と社会改良のための啓蒙活動とそれに関する情報センターとしての役割であった。ストロングはこの情報センターとしての役割をさらに拡大して、アメリカだけでなく世界の各地域に同様の社会福祉研究所をつくり、これとネットワークを組むことを考えていた。彼は1909年にブラジル、ウルグァイ、アルゼンチン、チリを訪れ、社会福祉研

究所の設立を説いてまわった。しかし、彼のアイディアは南米の各都市には急進的すぎたのか、社会福祉研究所が設立されたのはブエノスアイレスだけであった。⁴³⁾ 1916年にストロングがこの世を去るまでに、イギリス、スエーデン、デンマーク、イタリア、ベルギー、スペイン、オーストリア、ロシア、アルゼンチン、チリに同様の社会福祉研究所が設立されていた。⁴⁴⁾

お わ り に

1893年に歴史家 Frederick Jackson Turner は1890年の国勢調査の結果、アメリカ合衆国本土におけるフロンティアの消滅が宣言されたことをとりあげ、「一つの大きな歴史的運動の終わり」にあたって、「アメリカ史におけるフロンティアの意義」について省察した。⁴⁵⁾ ストロングにとって都市はアメリカにとっての新たなフロンティアであった。彼は都市が将来のアメリカの運命を決定するという認識をもっていた。⁴⁶⁾ 彼は都市のなかに新しい文明の最善のものと最悪のものとが混在すると考えていた。それ故、ストロングにとって都市は危機的であるとともに、もっとも大きな可能性を秘めたものであった。この認識は終始変化していない。⁴⁷⁾ アメリカと世界の将来のためにアメリカの都市を救うこと、これがストロングを社会的福音運動に駆りたてたものであった。

ストロングは都市が救われるまでは神の国は実現しないと考えていたが、同時に都市は救われ得る (can be saved) と信じていた。⁴⁸⁾ ストロングが社会的福音運動に関わった時代は、アメリカにおける資本主義の矛盾が顕在化した時代であった。彼はその現実をリアリスティックに認識していた。⁴⁹⁾ しかし、彼は社会主義についてはその限界を見抜いていた。彼は社会問題の中心は経済的不平等にあることを認識していたが、社会主義は「個別の症状を取り除くための治療法は提示するが、病気そのものを治すことはできない」と考えていた。⁵⁰⁾ 彼は経済的不平等は富の配分を公正に行なうことによって解決すると信じていた。彼にとってそれを可能にするものは「犠牲」(sacrifice)

と「奉仕精神」(stewardship)であった。⁵¹⁾すなわち、彼が「病氣そのもの」と表現したさまざまな社会問題の根源は「利己心」であり、それを犠牲と奉仕精神に変えるものはイエス・キリストとの出会いであると考えたのであった。彼は「労働問題の解決はイエス・キリストをとおして」可能であり、「新しい文明の進歩が社会問題を解決できるとすれば、それはキリスト教の線に沿ってであろう」と述べている。⁵²⁾

「教会(人間)はそんなに簡単に変わるものではない」ということを痛感したアメリカ福音主義連盟での挫折も、ストロングの信念を疑いに変えることはなかった。アメリカ社会福祉研究所は大企業の資本家を理事会の中心メンバーとし、財政的にも彼らに大きく依存していたが、そのことによってアメリカ社会福祉研究所の活動が資本家たちの利害によって左右されるのではないかという心配をストロングはほとんどもたなかった。彼は資本家たちも犠牲と奉仕精神へと改心していくと考えていたのであろう。このような楽観主義を可能にしたものは、19世紀後半のアメリカ社会を支配していた社会進化論とアングロサクソン文明とその宗教に対する信頼であった。人間と社会の進歩と社会改革の可能性を信じて、社会的福音の啓蒙活動に一身を捧げたストロングは1916年、69年の一生を終えた。文明への信頼に基礎をおく自由主義神学への懐疑のきっかけとなった第一次大戦の終結の2年前のことであった。

注

- 1) 『アメリカ研究』第22号(1988年3月)、71-88頁。
- 2) Muller, Dorothea R., "Josiah Strong and the Challenge of the City", (Ph. D. dissertation, New York University, 1956), p. 12.
- 3) Strong, Josiah, *The New Era: or the Coming Kingdom* (New York: The Baker & Taylor Co., 1893), pp. 207-208.
- 4) Gladden, Washington, *Working People and their Employers*, C. H. ホブキンズ『社会的福音運動の研究』(恒星社厚生閣、1979)、39-40頁 参照。
- 5) Strong, Josiah, *Our Country* (The Belknap Press of Harvard University Press, 1963 [1886]) .

- 6) *Ibid.*, pp. 97-98, 102.
- 7) 注1)の他に、拙論「世紀末と『都市』のイメージ」『聖書と教会』1989年9月号、8-13頁参照。
- 8) Ahlstrom, Sydney E., *A Religious History of the American People* (Garden City, New York: Image Book, 1975), vol. 2, p. 322.
- 9) Jordan, Philip D., *The Evangelical Alliance for the United States of America, 1847-1900: Ecumenism, Identity and the Religion of the Republic* (New York and Toronto: The Edwin Mellen Press, 1982), pp. 36-37.
- 10) *Ibid.*, p. 62.
- 11) *Ibid.*, p. 63-64.
- 12) Muller, p. 13.
- 13) ホプキンズ、前掲書、186頁。
- 14) 同上、119頁。
- 15) *National Perils and Opportunities: the Discussions of the General Christian Conference, Held in Washington, D.C., December 7th, 8th and 9th, 1887, under the Auspices and Direction of the Evangelical Alliance for the United States* (New York: The Baker & Taylor Co., 1887), pp. xi-xiii.
- 16) *Ibid.*, pp. 346-354.
- 17) Muller, pp. 35-37.
- 18) *Ibid.*, p. 37.
- 19) *Ibid.*, p. 41.
- 20) *National Needs and Remedies: the Discussions of the General Christian Conference Held in Boston, Mass., December 4th, 5th and 6th, 1889, under the Auspices and Direction of the Evangelical Alliance for the United States* (New York: The Baker & Taylor Co., 1890), pp. 12-13.
- 21) *Ibid.*, pp. 14-16.
- 22) *Ibid.*, p. 21.
- 23) 万国宗教会議に関しては、拙論「シカゴ万国宗教会議：1893年」『同志社 アメリカ研究』、第27号（1990年3月）参照。
- 24) Druyvesteyn, Kenten, "The World's Parliament of Religions," (Ph.D. dissertation, University of Chicago, 1976), p. 115.
- 25) Schaff, Philip, "The Reunion of Christendom", in *Christianity Practically Applied: the Discussions of the International Christian Conference Held in Chicago, October, 8-14, 1893, in Connection with the World's Congress Auxiliary of the World's Columbian Exposition and under the Auspices and Direction of the Evangelical Alliance for the United States: General Conference* (New York: The Baker & Taylor Co., 1894), pp. 314, 324, 339.
- 26) Strong, Josiah, "The Aims of the Evangelical Alliance for the United States", in

- ibid.* . p.258.
- 27) Jordan, pp.180-181.
- 28) Muller, pp.105-106.
- 29) *New York Times*, June 11, 1898. See Muller. . p.117.
- 30) Muller, p.109.
- 31) *Ibid.* . pp.54-55.
- 32) *New York Tribune*, June 11, 1898. See Muller, p.118.
- 33) Muller, pp. 172, 174-175.
- 34) *Ibid.* . p. 167.
- 35) *Ibid.* . p. 168.
- 36) *Ibid.* . p. 288.
- 37) *Ibid.* . pp. 129-130.
- 38) *Ibid.* . pp.180-181. パリ万国博のために書かれたストロングの著作が、*Religious Movement for Social Betterment* である。
- 39) *New York Tribune*, February 21., 1902. See Muller, p.181.
- 40) Muller, p.136.
- 41) Strong, *Our Country*, pp. 108-109.
- 42) Muller, pp.193-194.
- 43) *Ibid.* . p.344.
- 44) *Ibid.* . p.345.
- 45) 大下尚一他（編）、『史料が語るアメリカ：1594-1988』（有斐閣、1989）、127-129頁。
- 46) Strong, Josiah, *The Twentieth Century City* (The Baker & Taylor Co., 1902[1898]), pp. 32, 55.
- 47) *Idem.* . *Our Country*, pp.128-129; *idem.* . *Twentieth Century City*, p. 32; *idem.* . *New Era*, p. 185; *idem.* . *Our World : The New World -Life* (New York: Doubleday, Page & Co., 1913), pp.228, 282.
- 48) *Idem.* . "The Needs of the City," in *National Needs and Remedies* . p.62.
- 49) 拙論「ジョサイア・ストロングにとっての世紀末」、77頁参照。
- 50) Strong, *Our World : The New World -Life*, p.107.
- 51) *Idem.* . *Our Country*. p.248.
- 52) *Idem.* . *New Era*, pp.80, 162.